

Vol.1

Go-PAL

人生最高の瞬間を過ごすためのマガジン

特集
島を、楽しむ。

TAKE
FREE

飛島 (山形県酒田市)
栗島 (新潟県栗島浦村)
答志島 (三重県鳥羽市)
伊是名島 (沖縄県伊是名村)
and so on...

Go-PAL Vol.1

人生最高の瞬間を過ごすためのマガジン

特集

「島を、楽しむ。」

特集1 飛島の風に吹かれて

飛島（山形県酒田市）

特集2 小さな島に音楽祭がやってきた

粟島（新潟県粟島浦村）

特集3 路地裏探検隊

答志島（三重県鳥羽市）

特集4 ミーミンベー♪ミーミンベー♪

伊是名島（沖縄県伊是名村）

テーマ設定型紀行文

「私が島に通う理由。」

小澤 卓（全国離島振興協議会・財団法人日本離島センター）

呉 尚浩（東北公益文科大学 准教授）

金子 博（NPO法人パートナーシップオフィス 理事）

飯野昭司（公務員、旅人）

松井武史（東北公益文科大学 4年）

高橋千沙子（農業、自由人）

特集

島を、楽しむ。

松井武史 文、写真

Takeshi Matsui

武田純 文

Jun Takeda

柴田大輔 編集

Daisuke Shibata

6852もの島が存在する。その中に有人島は、たった2300しかない。島の文化は、その島独自の文化がある。島は、そこを訪れる者に対して、本土の毎日の喧騒でいつの日にか忘れ去られていた、心の風景を思い出させる要素を持っている。この特集では、山形県から沖縄県までの4島について、ライターが見て触れて感じた島の魅力を、見つけていく。

飛島の風に吹かれて

—山形県 飛島（とびしま）



▲本間食堂の「飛っ子ラーメン」。醤油ベースに飛魚の出汁、550円。

私を島好きへと誘ってくれた飛島。いくつもの発見や感動を与えてくれたのは言うまでも無い。いつ行っても新しい発見がある。だからこそ、いつ行っても胸がワクワクするのだ。5回目を迎える、とびしま天保そば・こども収穫感謝祭（以後、収穫感謝祭）が、飛島総合センターを会場に10月14日に開催された。私自身、去年は都合が付かずこの収穫祭に参加することが出来なかった。今年は晴れて参加することが出来たのだ。

迎えた当日、天気は晴れ。勢い良く船に乗り込んだものの、天気とは裏腹に海上は結構なウネリがある。当然のように定期船「ニユーとびしま」はその影響を受け、大きく揺れた。この日は多くの人が船に乗り、混みあっている。仕方なく甲板に出て横になり、一時間半の間、揺れと格闘していた。私の横では小さな犬が慣れない船と揺れに四苦八苦し、泣き声をあげていた。犬も人間同様船酔いするのだ。

ふと起き上がると、飛島が目の前に迫っていた。急いで船を下りる準備だ。先ほどの犬も船を下りると元気に歩き回っていた。

飛島に到着し、まずは腹ごしらえだ。飛島に来ると毎回お邪魔する本間食堂に行くことに。この店のメニューは飛っ子ラーメン、それだけだ。メンマ・ネギ・チャーシューだけがトッピングされたシンプル一杯なのだ。飛魚の出汁がめっちゃめっちゃ効いたスープが実に旨い。これだけ飛魚の出汁を贅沢に使ったラーメンは、この店ぐらいだろう。さすが飛魚の産地、飛島である。一同大満足であった。

トビシマカンゾウ保全のための草刈作業へと向かった。場所は荒崎が一望できる高台。飛島でも指折りの絶景ポイントだ。学生9人、汗をかきながら一生懸命草を刈り取った。「来年もカンゾウが沢山咲きますように」と、願いをこめて。カンゾウ達よ、来年も可憐な黄色い花を、沢山咲かせておくれ。

草刈を終え、夕飯までには少々時間があつた。そこで向かったのが館岩だ。ここはウミネコの繁殖地として、国の天然記念物に指定されている所だ。ここからは飛島の勝浦・中村両地区を見渡せるうえ、遠くは鶴岡、もちろん鳥海山も一望出来る。

時刻は午後5時、この時見えた夕日に染まる赤い鳥海山。上を見上げれば、まん丸のお月様。朝の高波はどこに行つたのだろうか、海はうそのように静まり返っている。今まで見た鳥海山の中で間違いなく一番綺麗な鳥海山だ。一同心を打たれ、出るのは「凄」の一言だけ。時を忘れ、島の風に吹かれながら見入っていた。カメラ小僧達は、終始カメラのシャッターが止まらなかった。

いつまでも忘れることのできない、心の原風景が誕生した瞬間だった。

▼館岩からみた勝浦・中村両集落。左に見える三角の建物は定期船が発着する「飛島マリンプラザ」。





▼飛島での草刈の様子。毎年、多くの学生が草刈に参加している、丸粋内、トビシマカンゾウの花。





飛島の風に吹かれて



▲飛島音頭の様子。小唄には、島民も踊りに加わった。

あゝ腹が減った、腹が減っては戦は出来ぬ。鳥海山に心を打たれ腹が減ったのだ。宿泊は公民館を借りていたが、夕食のみ沢口旅館で食べた。新鮮な刺身にアラメの煮つけ。飛島の幸に一同舌鼓。腹も満ちた。今夜の宿泊先へと向かった。

夜は、次の日披露する飛島音頭、飛島小唄の踊りを練習した。一同また疲れる。

一日の疲れを癒してくれたのが、飛島産「どいも」を使用した作られた「どいも焼酎」だ。この焼酎が驚くほど香りが良くフルーティーで飲みやすい。酔いも回り、そろそろ寝る時間。畳の上にマント、その上で寝袋に包まり、島スタイルの道具たちと夜を明かした。

迎えた当日、千沙子氏が作った特製イチジクジャム(激旨)をパンにタツプリと塗り、パンを食べた。朝ごはんでは気合を入れ、収穫感謝祭本番を迎えた。

収穫祭は昼から開始。午前は太鼓を叩きながら島を練り歩いた。とは言っても筆者はそれに同行しての写真&ビデオ撮影だった。

この為に集まった、公益大有志による太鼓メンバー。太鼓を叩きながら飛島の3つの地区(勝浦・中村・法木)を練り歩いた。多くの島の方が沿道に出てきてくれて、多くの手拍子をしてくれた。公益大生もこの声援に応え、一生懸命に太鼓を叩き、威勢良く島を回った。その際には、この日行われる収穫祭の宣伝もしっかりと行い、参加を呼びかけた。

太鼓の練り歩きが終了し、いよいよ収穫祭本番を迎えた。本番では、公益大生による太鼓演奏、飛島音頭、飛島小唄を披露した。これまで練習した甲斐もあって無事に音頭と小唄も踊り終えることが出来た。テーブルには、打ち立ての天保そば、島で収穫された「どいも」、サツマイモなどが並んだ。美味しい島の恵みに、自然と島民の方たちにも笑みがこぼれていた。

あまりにも旨すぎて、ついつい食べ過ぎてしまったことを思い出す。飛島の恵みに感謝しなくてはいけない。島の応援団と島民による年に一度の交流会。毎年、さまざまな形でお世話になっている島民の方へ、感謝の気持ちを表す機会が、この収穫感謝祭だった。

太鼓や踊り、天保そばや「どいも」、サツマイモなどもそうだが、それ以上に飛島をこれからも愛し続け、通い続けることが、最大の恩返しだと私は感じるのだった。

今度はいつ飛島にいけるのだろうかとかと考えながら、帰りの船に乗り込んだ。酒田に到着すると真つ赤な太陽、そして、太陽に照らされ輝く豪華客船「飛島」が酒田港に着岸していた。いつかこんな船に乗って、いろんな国や島の風を感じる旅に出てみたいと思うのであった。

▼公益大生による触れ太鼓。島に響く太鼓の音色に、思わず島民の顔もほころぶ。





小さな島に 音楽祭がやってきた

—新潟県 粟島（あわしま）



▲上段、「歌島」ステージ。中段左、フェリーからみた内浦地区。中段中、自転車を押す松井氏。中段右、島民の足である「フェリーあわしま」。

粟島で音楽祭が行われるのを知ったのは、粟島で7月中旬に開催されたクリーンアップ作戦に参加した時のことだった。これは興味深い、ということに参加することを心の中で決めていた。

酒田に帰り、早速ゼミ（呉ゼミ。私の所属ゼミ）内で有志を募った。その結果集まったのが、ダイボンと柴田氏、グーニーズこと武田氏、そしてラーメン大好き松井の3人であった。

迎えた当日、キャンプ道具を一生懸命抱えながらフェリーあわしまに乗り込んだ。この日はお客さんの姿はまばらで、大の字になりながら寝そべり一路粟島を目指した。

到着後直ぐに向かったのが粟島の役場だ。お土産を手渡し、以前お世話になったお礼と、3日間お邪魔しますとあいさつをした。

村長さんからチャッカリと軽トラを借り、キャンプ場へと向かった。このキャンプ場がなんと景色が美しいのだ。正面には海、海水浴が出来る砂浜が広がっている。しつかりと一等地の陣地も確保し、無事にテントも設営完了。意気揚々と役場へ軽トラを返却に向かった。

人間は欲深いものである。広い島を3日間快適に移動するためには、どうしても自転車を得たかった。ちなみに島には一時間300円のレンタサイクルがある。ために計算してみると、300円×48時間×3人＝43200円。これは高すぎて無理だ、と3人で落ち込んでいると、役場に勤めるホンボマサユキさんが「役場の自転車3日間使つていいよ」と言ってくれた。一同歓喜の声を上げた。マサユキさん本当にありがとうございました。

自転車もゲットしその足で向かったのは、漁火温泉おと姫の湯。なんと粟島には温泉があり、500円を支払えば日帰り入浴を楽しむことが出来るのだ。

日本海を眺めながら入る風呂はもちろん最高だった。風呂上りはやつぱりビールに限る。3人並んで一気に飲み干した。

心も喉も潤いキャンプ場へと到着。晩御飯の準備へと取り掛かった。今夜のメニューはバーベキュー。海を見ながら炭で焼く肉は実に旨かった。明日はいよいよ「歌島」本番、どんな音楽祭になるのかと思いを馳せながら寝袋の中に入った。

本番当日、この日はあいにくの曇り模様。本番は午後3時からというので、午前は島を散策した。1時ぐらいにはバスに乗って釜屋地区へと移動した。実際に「歌島」が行われるには釜屋地区だった。ちなみに粟島は、粟島が船が到着する内浦地区、反対側の釜屋地区から構成されている。

釜屋に到着、目の前にあった「かもめ食堂」で昼食にすることにした。予約のみで食べることが出来る「粟島らーめん」、なんと2000円。お店の方によると鮑などの魚介が入っているそう。一年に何食出るのが聞くのを忘れてしまった。結局ラーメン700円を注文。島産の具が沢山入った島らしいラーメンだった。特にメンマとジャガイモが目についたのを覚えている。



▲かもめ食堂のラーメン。粟島産の筍、ジャガイモをはじめ、粟島産の食材を多く使用している。700円。



小さな島に 音楽祭がやってきた



▲上段、旅のお友のザック。中段左、千代華を焼く菓子職人。
中段中、夜の「歌島」ステージ。中段右、フェリーあわしまと松井氏、武田氏。

会場は大きな野外広場で、仮設のステージが建てられていた。午後からポツポツと降っていた雨も、本番が始まる頃には徐々にあがりはじめ、無事に「歌島」が開始された。地元新潟県の村上地区を中心に、遠くは関東などからも出演があった。また栗島からは飛島小中学校の生徒やアマチュアバンドの参加もあった。栗島に縁があり、まさに栗島を愛する人たちの参加によって、音楽祭は行われた。

会場の一角にはフードコーナーも設けられていた。3人の目が直ぐにいったコーナーが、「村上牛」。1本500円。ジュシーな村上牛の串焼きを片手に、お決まりのビールで気合を入れた。はたしてこんな贅沢が許されるのだろうか。

飛島小中学生の合唱が始まった音楽祭、栗島の雄大な自然の中で、波の音、風の音、そして音楽。すべてが一つになって、初めてこの音楽祭が成り立っていた。

「歌島」も終盤を迎え、男3人一番盛り上がったのがチャンベビというアーティストの「栗島の一日」という曲だった。

一同席を立ち上がり、会場の前のほうへ。「肉・肉・肉・肉・肉はないよ、栗島だよ」。今でもこのフレーズが頭から離れない。栗島には肉は無いが、とにかく魚が旨いので全く問題が無いのだ。ちなみに「栗島の一日」はCDとして販売されている。

天候には恵まれなかったが、それでも島で開催された音楽祭はとても素敵な時間だった。自然と音楽が一体となって、そこには最高の空間があった。



▲栗島銘菓、「千代華」。島産の大豆をふんだんに使っている。1個100円。

この空間を肌で感じたことの喜びを、その夜男3人噛み締めた。

最終日は朝から温泉に入り、のんびりと過ごした。

土産、おやつに最適なのが栗島の銘菓、「千代華」だ。千代華と書いて、島の人々は「ちゅうかわ」と呼んでいる。初めて食べた時には、こんな美味しなお菓子が島にあるのかと驚いたの

▼上段、内浦キャンプ場、栗島では海のそばで
キャンプができる。下段、キャンプ場から見た日
本海、対岸には笹川流れが見える。



路地裏探検隊

—三重県 答志島（とうしじま）

三重県鳥羽市で開催された海ごみサミットも無事に終了、それと同時に私たちの視線は答志島へと移っていった。

三重県鳥羽市答志島、太平洋に浮かぶ島を訪れるのはこれが初めてだ。

答志島には、答志・和具・桃取の3地区がある。答志地区には鳥羽市佐田浜港から定期船で約25分ぐらい。伊勢湾の風に吹かれながら向かった。

答志地区は狭い路地が多くある。また建物も古い建物も多く残っている。この2つが上手く組み合わせ、昭和を思わせる佇まいになっている。

この路地は散策するだけでも実に楽しい。まるで迷路のようになっていく狭い路地には、「サンデ（サザエの底）」と呼ばれるところもあった。少年に戻ったかのように、いろんな路地をあちこちに歩き回った。

路地を歩いていると、何処の家でも壁やドアに、マルハチ（丸の中に漢字で八と書かれた印）と書かれているのに気が付く。これは八幡祭で使われた炭を使って書かれた魔よけの印だそう。色んな所にマルハチがあるので、マルハチ写真集を作っても面白いな、と思った。



▲答志島で活躍する「じんじろ車」、島の鉄工所が一台ずつ手作りしている。

狭い路地の交通には、車は不便である。そんな時に島で活躍していたのは、小回りの効く原付バイクだった。

狭い路地を原付バイクに3人乗り、そしてノーヘルが島スタイルだ。これに対抗する勢力を誇るのが、「じんじろ車」だった。じんじろ車とは、手押し車のことだ。この島でのじんじろ率は非常に高く、色んなタイプのじんじろ車が至るところに置いてあった。この光景もこの島ならではの光景だ。これまたマルハチ同様、写真集にしたら面白いと思った。

景色が凄く綺麗だということ、展望台へと向かった。展望台からは答志地区が一望できるうえに、遠くには神島も見ることが出来た。展望台から見ると答志地区は、いかに民家同士が密集しているかが違う形で見る事が出来た。

島の散策も終わり、早めに宿へと向かった。2日間お世話になったのが、民宿旅館「しまだ」。

旅館の近くに銭湯があるとということで、この日は旅館の風呂ではなく、そちらにお邪魔した。番頭さんに300円を支払い、風呂に入った。この風呂がなんともいい雰囲気なのだ。いかにも昔からあるという雰囲気、をかもし出している。これが銭湯というもののなか。こんな銭湯が残っているとは、衝撃的だった。更に銭湯に行つたことがない私にとつても新鮮な体験だった。

夕食までに時間があるということ、近くは神社と寺へと行ってみた。小学生がちょうど遊んでいたの声をかけると、こつちで龍の形をした木があるんだよ」と案内してくれた。見事に龍の形をしていた。これには凄く驚いた。しっかりと神社とお寺に旅の安全を祈願し、宿へと向かった。

▼答志島の路地裏、答志島にはこのような路地裏が縦横無尽に張り巡らされている。



▼上段、展望台から見る海。下段、答志地区唯一の銭湯、「マルハチ」のマークが見える。島ではほとんどの建物に描かれている。



宿に戻ると、直ぐに夕食だった。テーブルの上には、答志港に水揚げされたばかりの魚介類を使った料理が並んでいた。

全部旨かったが、一番インパクトがあったのが茹で伊勢海老だった。身はプリプリ、文句無く旨かった。

2日目の午前は、答志地区の市場へ行った。衛生面には一際気を使っている市場で、受付を済ませると、帽子を被り、スニーカーを消毒してから入場となる。

市場内には次から次へと新鮮な魚が水揚げされてくる。市場内には沢山の生簀があり生きたままの魚介類が沢山いた。初めて競りを見ることも出来た。

衛生管理が行き届いた市場は非常に活気があるのだった。

午後からは島の反対側、桃取地区へと行くことにした。親切な旅館の方が送り迎えをしてくれた。答志から桃取へ車で15分ぐらゐの距離だ。

同じ島だが、答志と桃取では雰囲気がちよとずつ違っていた。桃取では牡蠣の養殖が盛んで、大きな加工所などもあり活気がある。3つの地区の中では唯一稲作が残っている地区でもある。田んぼがあるだけでなく、以外にも雰囲気ガラリと変わっ



▲島で獲れた伊勢海老、黒潮の恩恵を得るため海産物が豊富である。



▲鳥羽磯部漁協答志支所でのセリの様子、朝から昼まで、新鮮な魚介類の取引をしている。

まうものである。今度は非、答志島産米を食べてみたいものだ。

この日の夜の料理も、豪華なものが並ぶ。中でも、新鮮な鮑の刺身は絶品だった。答志島での最後の夜を、新鮮な魚介類とお決まりのビールで締めくくったのであった。

3日目は9時前の船で帰ることにした。その前に、まだ行っていない和具を散策した。答志島同様、狭い路地が広がっていた。

土産屋も、朝早いにも関わらず開いていた。そこでシラス・ヒジキ・太刀魚の干物を、商売上手のおばちゃんに50円値引いてもらい、お土産に買った。その後、鳥羽行きの船に乗り込むのだった。

あつという間の3日間だったが、いよいよ島ともお別れだ。

日本海とは何処か違う、太平洋の大海原。初めての太平洋側の島では色んな不思議と出会った。

まだまだ見たいところ行きたい場所が沢山あった島だった。そう、またいつか来よう。答志島へ。

路地裏探検隊

▼定期船から見た答志地区。



ミーミンベー♪ ミーミンベー♪

—沖縄県 伊是名島（いぜなじま）

沖縄の北西にある伊是名島で1年に一度行われる貴重なお祭りに僕は参加していた。

お祭りの名前はイルチャヨー。伊是名島の勢理客という集落で毎年今旧暦の8月に行われる。航海安全を祈るお祭りらしく集落一体となつて盛り上がる。

「ミーミンベー・ミーミンベー」という掛け声は、お祭りで歌っていた掛け声の一部である。ほとんど、いや、まったく何を言っているのかわからない歌であつたが、この部分だけが今でも耳から離れなく時々口ずさんでしまう。

特にイルチャヨーの神様がおもしろい。大きくて憎めない顔をした仮面をつけ、子供達を後ろに引き連れ歩き回る。その光景はなんとも奇妙で可愛らしい姿であつたが、どこか懐かしさを感じ伝統的なお祭りだということを肌身で感じた。

みんなで泊まった古民家再生宿泊施設「あんじょー」も素晴らしかった。今だに古民家の風景が色濃く残っている勢理客の集落で、その景観を崩さずに観光資源となつていく。

まさに島暮らしができる宿。特別贅沢ができるわけではないし、豪華でもない。しかし、これ以上の至福はないと感じたのは僕だけではないはずだ。

古き良き島、伊是名島。今日も島の人々は元気に暮らしているだろう。



▼イルチャヨーの神、この祭りは、沖縄でも伊是名島と伊平屋島にしか残っていない。



テーマ設定型紀行文

「私が島に通う理由。」

人が島に通うようになったきっかけは、

その人の数だけの答えがあります。

ここに登場する6人のきっかけを、

ちよつとだけ、覗いてみましょう。

船の時間を気にしながら

駅の改札を駆けぬけ、

港に向かうバスに乗りこむ。

船着き場に降り立つと、

潮の香りと視界には青い海が広がる。

出発の時間が近づくと、

チケットが売られ、

徐々に人が集まってくる。

船は汽笛を鳴らして岸壁をはなれる。

遠ざかる陸を眺め、

波に揺られていると、

いつのまにか

日々の慌ただしさから解き放たれていくのだ。

海はいつでも渡れるとはかぎらない。

荒れば外の世界との交通が遮断されてしまう。

島は自然の大きな揺りかごの中にあり、

その力の前には決して抗うことはできないのだ。

しかし、

だからこそ、

自然への敬意と挑戦から

島人の情け心や深い知恵が紡ぎ出されてきたのだろう。

私を島へと突き動かすのは、

そのような島人との触れ合いや出会いなのである。

その明るさ、その涙もろさに動かされ、

島へと向かってしまうのだ。

小さく波間に見える島が近づいてくる。

船を降りると、

そこには久しぶりの笑顔が待っている。



▲小澤卓、全国離島振興協議会・財団法人日本離島センター。

▼飛島・勝浦港から定期船が出港する。離島では毎日あたりまえのように見られる風景である。2008年撮影。



「島」に出会ったのは、いつの頃からであろう。

1989年のことになるが、大学四年の夏休みに、能登島（石川県）にあるガラス工房での吹きガラス制作の講習会に参加するため、一週間ほど島に滞在したことがある。

当時、都会での生活に行き詰まりを感じていた僕は、ガラスに向かい合いながら、火祭りに参加したり、海で泳ぎ、島を歩きめぐりゆったりとした島での時間を過ごすなかで、再び自分自身を取り戻していった。講習会の最終日、工房の風景が黄金色に輝いていたことを想い出す。目に入るすべてのものが生き生きと見え、打ち上げのパーティーの食卓に並んだトマトが「撮って！」と言わんばかりに語りかけた。その新鮮な輝きをカメラに収めた作品は、今でも僕のなかでの最高傑作の一つとなっている。

その後、さまざまな島めぐったが、深い関わりを感じているのは、1994年に屋久島に滞在し関わった半年間、1998年から本島をはじめ、離島に通い続けている沖縄、そして飛島である。

また、2007年からはじまった三島交流（佐渡、粟島飛島）で、日本海の島々とも急速につながりが深まっている。

島は、以来僕にとって、生

きる上で大切なものに気づかせ、自分自身と自然、そして内なる生命に再びつながることを教えてくれる、かけがえない場となっている。

島人の逞しさとやさしさに触れ、共に何かを創りあげていく喜び。そして、島の経済だとか、民族だとか、そういうことだけではなく、それぞれの島が持つ自然と人の織りなす美しい世界の向こうにある、島の魂そのものに魅かれるのだ。

ある学生は「島とは、自分の呼吸を取り戻すことのできる場所」だと言った。自然の中で、心と体の内なるリズムにそった「いのちの呼吸」を取り戻すための鍵が島にある。四方を海に囲まれた島では、漁業を中心に生活が営まれる。人間の都合で決められる人工的な時間感覚ではなく、その日その日の自然の時間の流れにそって生きざるを得ない。このことは、あらゆる思考や行動の根幹にかかわることだ。自然と人間との共生社会を実現するには、「自然の時間感覚」から生まれる発想こそを、豊かに育む必要がある。

大自然の中で、自分自身や他者の「いのち」と深く向き合う。自分の中の自然性を見失った現代に生きる私たちにあって、かえがえない学びの場が島にある。これが、私が島に通う理由である。



◀ 呉尚浩、東北公益文科大学准教授、20年来の島通い。

▼ 三重県答志島から神島、遠くは愛知県を望む。2008年撮影。



十代の頃、東京の神津島に通い、キャンプを楽しんでいた。いま、酒田の暮らしに慣れ始めた頃から、機会があれば飛島にいつている。どくとくの「島の時間」と「島の空間」を感じ、なんとも言えない心地よさを受けるが、海岸に漂着するごみの現状を見るにつけ、その心地よさも低下する。

飛島クリーンアップ作戦で多くの見知らぬ人々が島に行き、何をそれぞれ感じ取って日々の生活に戻っていったのだろうか。大量生産、大量消費、大量廃棄の社会構造の負の現実的側面を見ることで、経済指標で捉える「豊かさ」に疑問を抱かせてくれる。そのようなことも、飛島に訪れる理由の一つになってきている。

あさっては、漂着ごみの処理技術開発の企業関係者の案内で、また慌ただしい島行きになる。いつかきれいな島の海辺で、うつらうつらできる日が来るというし、子どもにはその体験をしてほしい。

まずは、

大人たちで何とかしていかないと。



▲金子博、特定非営利活動法人パートナーシップオフィス理事、クリーンアップ全国事務局地域コーディネーター。飛島クリーンアップ作戦では、中心的な役割を担っている。



▼飛島に流れつく漂着ごみ、時には外国からも流れ着く。中段のペットボトルはロシアから。2005年撮影。



初めて飛島へ渡ったのは今から17年前。
島を縦貫する農道の担当者として、
工事の前に調査する遺跡発掘の打ち合わせに
出かけたのが最初だった。

それより十数年前、

高校1年の夏に飛島で野宿をする計画を立てたことがあった。

船を予約し夏休みを心待ちにしていたが、
直前になって島内でのキャンプが禁止となり、
計画はあっけなく中止。

それ以来、飛島は縁遠い場所になっていった。

そうした積年の思いもあって、
初めて訪れた飛島は見るもの聞くものすべてが新鮮だった。

鬱蒼としたタブの林、
幹回りの太いクロマツ、

飛び交う渡り鳥のさえずり…。

農道の予定路を歩きながら、
迫ってくるような島の自然に圧倒された。

農道の担当は2年だったが、

その後も毎年のように島へ通っている。

点検を兼ねて約4キロの農道を歩き、
林の中の遊歩道を歩き、

海沿いを歩く。

島中のほとんどの道を歩いたように思うのだが、
何度歩いても飽きないのが不思議だ。

今年3月、早春に咲く可憐な草花の群落に出会い、
これまで知らなかった飛島の魅力が一つ加わった。

来年もあの花たちに会えるだろうか…。
島通いはまだまだ続きそうだ。



▲飯野昭司、公務員、
旅人。

▼荒崎から見た夕日。飛島で見る夕日の中で、
格段に綺麗である。2008年撮影。



私が島と出会ったのは、大学3年の5月、飛島で毎年行われているクリーンアップ作戦参加のために島を訪れた時だった。そう考えると島に通うようになったのは極最近だ。今年度は飛島（山形）に4回、粟島（新潟）に2回、佐渡島（新潟）、伊是名島（沖縄）、答志島（三重）、にはそれぞれ一回ずつ行くことが出来た。まさに今年は島三昧の年になったのだ。

ここで私が感じる島での鉄則を発表することにする。

- 一、島では原則一泊以上、出来れば二泊以上すること。
- 一、島には「おじやまします」の気持ちで行くこと。
- 一、島では島民の方に自らあいさつをすること。
- 一、島では島の決まりに従うこと。
- 一、そして島を満喫すること。

せっかく島に行ったのに日帰りではもったいない。かといって、一泊では島を満喫するには時間が不十分すぎる。やはり丸一日時間を自由に使うために、二泊以上することが最適である。

島に行ったら、あいさつをする。島の方と交流する一つのきっかけとなる。各島には島独自のルールがある、これは必ず守る。ごみは持ち帰る、水は節水を心がけるなどの気遣いも必要だ。後は島を満喫すること、これに限る。

まだ訪れた島は少ないが各島々それぞれに違いがあった。同じ日本なのに本島と島の生活は大きく違う。皆で助け合いながら生活する、古き良き時代の日本の生活が、島には現在でも多く残されているのではないかと感じた。また自然や文化を見ても、古くからのものが大切に残されている。島で自分を見つめ直し、そして島から新たなエネルギーをもらう。私にとって島は大きな存在である。

これからも色々な島に出かけてみたい。

待ってる、全国の島たちよ。



▲松井武史、東北公益文科
大学4年、ラーメン王。

▼御積島、烏帽子群島と荒崎を望む。2008年撮影。



はじめて飛島を歩いたとき、
目に焼きついているのは
鳥たちの羽だった。

6月〜7月、島では断崖絶壁にウミネコたちが
巣をかまえて子育てをする。
その時期、島は、ネコのような
“ニャーニャー”という声に包まれる。

うちつける波の音の中、
岩に登って目にしたのは、
ウミネコの死がいだった。
むき出しの自然が、そこにあった。

島に通うにつれ、
一回行っただけでは見えない島の魅力が見えてきた。

トビウオ漁、
そこで暮らす人々。

島の食べものはおいしい。

じゃがいもは島で作ると特別に美味しくなる。

島の力がいもをおいしくさせるのかもしれない。

毎年島に行ったのに、

今年はずっといけなかった。

夏になると、体がうずうずして、島に行きたくなった。

島の空気を吸いたい。海に足を浸したい。

——島に呼ばれている感じがした

夏、飛島はいつものようにそこにあった。
来るたびに思う。

島が好きだ。



▲高橋千沙子、農業、自由人
東北公益文科大学を休学中
に自然農にハマる。

▼夕日の時、飛島からみた鳥海山。飛島では鳥海山から出る
朝日、海に沈む夕日を見ることができる。2008年撮影。



Go-PAL
発刊予定



次号予告

Go-PAL Vol.2

人生最高の瞬間を過ごすためのマガジン



特集

「公務員、バンザイ。」

知られざる公務員の謎について解き明かす!!!

ほか、特集満載!!

取材協力

- 【飛島】とびしま総合センター、飛島天保そば・ごどいも収穫感謝祭実行委員会、沢口旅館、本間食堂（あづま荘）、大谷謙治、佐々木英樹
- 【粟島】粟島浦村役場、勝ちゃん、かもめ食堂、渡辺文良
- 【答志島】島の旅社、鳥羽磯部漁協答志支所、民宿しま
- 【伊是名島】NPO島の風、勢理客青年会
- 【special thanks】飯野昭司、小澤卓、金子博、呉尚浩、高橋千沙子、全ての呉ゼミ生、お世話になった島民の皆さん

本物の友情が、そこにはある。



飛島、田圃、畑、そしてA研…
僕たちはこの場所で出会い、この場所で楽しむ。
全てが僕たちの遊び場であり、学びの場所である。
全ての人に、最高のひと時を一



呉尚浩研究室

<http://homepage3.nifty.com/GOKEN-KOEKI-U/>

Go-PAL

Vol.1

2008年10月25日発行
第1巻1号 第三種郵便物「不」認可

編集人 柴田尚浩

呉ゼミ発行